Fate/stay night　－ちょっと異世界までお使いしてきた英雄くん－

駄猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　－ちょっと異世界までお使いしてきた英雄くん－

【Ｎコード】

Ｎ５５６７Ｘ

【作者名】

駄猫

【あらすじ】

始まりは一つの世界跳躍。関西弁な英雄なお馬鹿な主人公が織りなすもう一つの√。Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔとファンタシースター２∞のコラボ（？）やりたい放題やっちゃいますのでお気をつけください。

第一話　運命は今宵始まる・・・格好いいけど厨二やん　ｂｙ悠人（前書き）

初めての方は初めまして。
哀川君系列見てくれた方はどうもです。
駄猫はまた変な作品をつくりましたｗ

第一話　運命は今宵始まる・・・格好いいけど厨二やん　ｂｙ悠人

《ｓｉｄｅ：Ｙｕｔｏ　Ｋａｎｚａｋｉ》

あ、ども～神崎悠人申します～
タイトルに書いてあるとおりちょっとお使いしてきました
ＳＥＥＤっつうのをぶった切ったり、とある少女を二人程助けたり、
世界を救ったりしてきました
いや～楽しかったですわ～
所属は”リトルウィング”って言うところで、世界救ったら粒子に
なって目が覚めたら元の世界で
ビックリやろ？それ以上にビックリしたのが、魔法つかえんねん・・
・どやっ？
あ～・・・でもエミリアとかナギサとか心配やわ～・・・大丈夫な
んやろか？
因みに装備は”コクイントウ・ホウズキ”と”ロンギヌスの槍”っ
つうのを使っててん・・・強いねんで？
聖書に出てたアレとは多分違うけどな～
あ、言っとくで？俺、転生者とかいう変な種族ちゃうからな？
きちんと『冬木』生まれの『冬木』育ちやからな？
さて、これから学校なんやけど・・・

「お～い！悠人～！」

はい、幼なじみのシローくんです
フルネームは”衛宮士郎”夢は”正義の味方”・・・格好いいよね～

「悠人先輩大丈夫ですか？」

こちらの美少女は”間桐桜”こと桜ちゃんです
え？何が違うのかって？桜じゃなく桜なんだけど・・・分かんないよね？（笑）
イントネーションギャップだね～

「大丈夫やで！後、暇やで！」

心配かけたので元気よくサムズアップ！

「暇でどうすんだよ・・・これから学校だぞ？」

お二人とも苦笑・・・あれ？なんか間違ったこと言った？

「取り敢えず学校に行きましょうか」

取り敢えずって・・・俺泣くよ？
さて今日も快晴だしガンバルかな～・・・

―学校つくまで・・・・戦略的カット！―

「・・・」

今、目の前歩いてるのが皆のアイドル兼俺の幼なじみＰａｒｔ２の
”遠坂凛”
俺は凛ちゃんって呼んでるで～・・・なんか怒られんねんけどな・・
・
確か家訓が『どんな時でも余裕を持って優雅たれ』やったかな？め
っちゃ美少女やで・・・どやっ？

「オハヨー凛ちゃん」

―キッ―

「おはよう、神崎くん」

・・・ね？怖いやろ？美少女やからこそ怖いねんよ・・・
全く・・・美少女は笑ってると可愛いねんけど睨まれると本気で怖
いわ～・・・

―放課後迄・・・知略的カット！―

「おぅ！衛宮と神崎ぃどうせ暇だろ？道場掃除しといてくれよ～」

「おう、良いぞ」

「・・・なんでそんな簡単に即決すっかねぇ？シローくんもやるようやし俺もやるよ」

「ククク・・・ありがとうな衛宮と神崎」

「テメェの為じゃねぇぞ？ワカメくん」

「ッブ・・・ワカメ・・・」

お・・・受けてる・・・取り巻き少女Ａ爆笑やん

おお・・・芋づる式に笑いが広まってる・・・ｋｔｋｒ違う違うキタコレ！

笑いはええで～（笑）ワカメもプルプルしてるし（笑）

「悠人・・・ブッ・・・そういうのは・・・ブフッ・・・駄目だって」

「いや～見た感じそのまま言っただけやから・・・大丈夫やろ？ワカメちゃん？」

「ワカメワカメ五月蠅い！！！お前らも笑ってないで行くぞ！！！！」

「あ・・・待ってください先輩！」

―掃除終了まで・・・メイド的カット！―

「そう言えば、悠人・・・さっきからギンギン変な音が鳴ってないか？」

「ン～金属音やな・・・見に行ってみる？」

「・・・面白そうかもな・・・」

「せやせや・・・なら行くぜい？シロヤン」

「誰だよシロヤンって・・・」

「Ｙｏｕだよ～！」

「・・・何故英語にしたんだ？」

「何となくに決まってるじゃないか～」

俺の座右の銘は『行き当たりばったり』だからねぇ
後は『困ってるの見かけたら助ける・・・それが偽善でも』ぐらいかなぁ・・・

「・・・え？」

「・・・うわ～お・・・」

え～・・・なんか全身青タイツの変態さんとガチムチな赤の人がいるんですが・・・

レベル的には青が１５２位で赤が１５１位かな・・・
因みに俺はレベルで言うと転生８０時に二回からの８０位だな

・・・今なんか意味分からないこと考えてたような・・・
まぁ、ええか・・・
おっとぉ、青のタイツがなんかコッチに・・・・キタァアアアアア！

「シローくん！逃げるぞ！」

「お、おう！」

―家まで・・・アイス食べながらカット！―

「流石にココまで来れば・・・」

「シローちゃん・・・・それフラグや・・・」

―ドガッシャン―

「おい、坊主共・・・よくもまぁ、面倒なとこまでにげてくれたなぁ」

「だって青タイツさん殺す気まんまんだろ？」

「え・・・マジか？」

「シローくん・・・この人の殺気パネェから・・・
逆になんで受け流せてるの？っておもってるんだけど・・・て悠人は悠人は言ってみる」

「もういいか？坊主達よォ・・・」

「しょうがない・・・か・・・シローくん実は俺さ・・・英雄なんだよ～」

「へ？」

「巫山戯たことぬかしてんじゃねぇぞ？坊主」

「はぁ・・・うっせぇから黙れ三下・・・来い・・・”コクイントウ・ホウズキ”！」

「真剣！？」

「・・・ほぉ・・・」

「んじゃ・・・歯ァ食いしばれ三下・・・俺の真剣はちっとばっか響くぞォ！」

「やってみやがれ！」

《side：Rin　Tosaka》

「え！？何で悠人が！？」

「フム・・・あの男、危険だな・・・」

「なんでそんなことが言えるのかしら？」

「先ず、ランサーの早さについて行けているということだろうな」

「そう・・・だけど・・・」

「あの男との関係はあるのか？」

「・・・ええ、幼なじみよ」

第一話　運命は今宵始まる・・・格好いいけど厨二やん　ｂｙ悠人（後書き）

楽しんで読んでもらえたなら光栄ですｗ
リハビリがてら新作ですｗ
哀川君更新のが優先なんで、週一更新になるかな？
では！

第二話　問おうアナタがマスターか？いいえ、コイツは悪ふざけの塊です　by

《side：Yuto　Kanzaki》

はぁい・・・神崎悠人やで！

取り敢えず、前回に気付いたことはコレが聖杯戦争やってことやな・・・

何で知ってるのかって？

だって、第四次聖杯戦争みたで？俺・・・

無精ひげのおじさんと神父っぽいキチガイ変態ときんぴか鎧見たもん

取り敢えず相手を受け流して受け流して受け流して・・・

ンで、隙作ってわざとソコに突かせてカウンターってのをずっと半永久的にやってるで・・・

ええ加減相手もイライラしてきてるようやし、決めるかな～

「なぁ、青タイツ・・・そろそろラストにせぇへんか？お前もイライラしてきた頃やろ・・・」

「わかってんならそんな戦い方すんじゃねぇ！」

「いや、一応戦闘に関しての天才には俺ってば戦闘の才能がないからこういう戦い方になんねよ」

「・・・嘘つくな！テメェが才能ねぇっつうなら俺は非才になるっつぅの！」

「・・・・・え？」

「え？っじゃねぇよ！」

「・・・いや～、だってさ～向こうのヤツ達にゃ俺より強いの多かったぞ？」

サポートのメイドロボとかエミリアとかナギサとか
あとはシズルとか・・・結構強いの多いぞ？

※因みに、一緒に依頼行くとき主人公±０のレベルになっております。
よって、主人公の思いこみです。強さは
悠人＜＜＜＜クラウチ＜ウルスラ＜シズル＜ユート＜エミリア＝ナギサ＝ルミアな感じです。

・・・今、なんか変なテロップみたいなの流れたよ～な気がしたんやけど
ま、ええか！

「・・・お前より強いって・・・どんだけだよ・・・」

「いや、俺弱いんやって基本！こういう戦い方してるから生き残れてんねん！」

「まぁ、いい・・・よくねぇけど、まぁいい・・・
なら決着つけるとすっか・・・俺もそろそろ疲れてきてるしな」

「・・・俺空気だよな・・・？」

「・・・・ゴメンシローくん！忘れてた！」

「畜生！！」

「・・・漫才してるトコわりぃんだが・・・もういいか？」
「・・・もうちょいだけまってやシローくん・・・・・ええで・・・・やろか」
「・・・悠人・・・やっちまえ！」
「おうよ！シローくん！」
「幻獣召喚・・・」「突き穿つ－ゲイ・・・」

《side：Siro　Emiya》

お、俺の出番か・・・
こんな空気で言うのもなんだが、やっとか・・・
・・・原作主人公なのにっていうのはメタだな・・・

今、悠人が戦ってるのを見てびびってる・・・
コイツがさっき言ってた「実は俺さ・・・英雄なんだよ～」って言葉・・・
戦いが始まるまでは嘘だと思ってた・・・でもこの戦いを見てからは・・・
嘘じゃないってコトが分かった・・・正直怖い
・・・でも、親友が戦ってる、逃げられるわけ無いじゃないか・・・
今出来るのは情けないけど応援だけ・・・ならやれることをやって

やる！

「・・・悠人・・・やっちまえ！」

「おうよ！シローくん！」

悠人は腕を前に伸ばし、青タイツは夜空へ跳んだ

「幻獣召喚・・・」「突き穿つ―ゲイ・・・」

悠人の後ろに赤の・・・魔神！？

《side：Yuto　Kanzaki》

「ミラージュブラスト！！」「死翔の槍―ボルグ―！」

「オラァ！行きやがれ！んでそのまま逝きやがれ青タイツ！」

「！？この俺が押されているだと！？」

「こちとら馬鹿でかいモン相手にしてたんだ！そんな槍効かねぇ！」

―ズドン！―

「うがぁ！？」

―シュー・・・―

「・・・終わったか・・・生きてるみてぇやけど・・・」

「・・・なんで生かしてんだ？」

「いや、楽しかったしな・・・また戦いたい思って・・・
その変わりにシローくんにゃ手だすなよ？俺に負けてんからこれぐらい聞いて貰うで」

「・・・っぶ・・・フハハハハハ・・・・おい！坊主！テメェの名前教えろ！」

「俺か？俺は・・・悠人・・・かn」

―ズドン！―

「・・・！？なんや！？」

「・・・避けられたか」

「何してるのよ！アーチャー！！」

「わりぃがココは引かせて貰う！悠人スマねぇな・・・」

「早く逃げろよ～青タイツ・・・てな訳で凜ちゃんどういうつもりや？」

「知らないわよ！彼処のアーチャーに聞きなさ・・・え？なんで彼

処に」

・・・あれ？ヤバイよな・・・空気的に・・・
ちょ！？白いの振りかぶって何しようと！？

「シローくん！！危ない！！」

―ドン！！―

・・・あ、力の限り突き飛ばしてもうた・・・

―キラーン・・・―

・・・あれ？何か光って・・・

「（ぽけ～・・・）・・・」

「問おう・・・」

あぁ・・・聖杯戦争ってやつにシローくんも呼ばれて・・・
ってそういや、シローくんの手に厨二刻印ってあったけか？
なかったよ～なきがするんやけど・・・

金髪美少女がコッチを向いて

「アナタが私のマスターか？」

・・・え？俺ですかい・・・？空気的にシローくんじゃね？

「いえ、アナタです」

地の文にツッコムなし・・・

「ふむ、気をつけます」

「・・・まぁ、良いねんけどね？俺がマスターで合ってるん？アッチじゃないん？」

「ええ、アナタです」

「・・・はぁ、俺もついに巻き込まれ症候群になったかぁ・・・」

「・・・」

感慨深いわ～・・・なんちゅうか・・・

取り敢えず俺に今できることはＳＥＥＤみたいな汚れた聖杯を破壊することな筈や・・・

あの無精ひげおじさんが光を使って壊したように・・・

「ハイ、俺がマスターや！よろしく頼む！」

「これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある、ココに契約は完了した」

「・・・よろしくな・・・」

「・・・（ポカーン）
・・・な！ん！で！アンタがセイバーを召喚するのよ！！！」
「・・・セイバーやっけか？俺のコトは悠人でいいで！」
「無視しないでよ！」
「ユウトですか・・・ああ、この響きは実にアナタに似合っている」
「・・・私のセリフが・・・まるまま・・・」
「うわ～・・・まさかのかぶりのセリフとはね・・・
しかも私たちの方は基本表に出てこないから、完全に原作知らない人からしたら
私達の方が・・・」
「・・・メタいぞ？遠坂・・・」
「五月蠅いわよ！衛宮くん！」
「・・・なんでさ？なんで怒鳴られたんだ？」
「セイバー・・・俺の魔力てセイバーからしたらどれくらい？」
「そうですね・・・ソコのマスターの数十倍ですかね」
「・・・本当になんでアンタばっかり！！」
「・・・いや、もしそうやねんやとしたら・・・」

―違う場所にて・・・―

「はぁ、あの人は何処に・・・」

「本当よね～・・・勝手にどこかへいっちゃってさ・・・」

「そうですね・・・」

「・・・今日もアイツ達空見に行ってんのか・・・」

「そうだネ・・・あの娘達の救世主であり、支えであり・・・」

「・・・来るときも消えるときも台風のようだったな」

「そうね・・・」

「悠人ー！早く帰ってきてくれー！一緒にプリン食べるって約束し

ただろー！」

第二話　問おうアナタがマスターか？いいえ、コイツは悪ふざけの塊です　b

はい、書きました！
誤字脱字の報告はお願いします！
では！

第三話　魔力あっても使えなきゃ唯の魔力タンクやし・・・ｂｙ悠人

《ｓｉｄｅ：Ｙｕｔｏ　Ｋａｎｚａｋｉ》

・・・ん？あぁ・・・

自分が唯の魔力タンクってしった神崎悠人やで・・・

俺もう駄目やわ・・・才能ねぇもん・・・魔法使いたいのに、才能ねぇもん・・・

某薬味先生みたく魔法使いたい・・・はぁ・・・

「アンタにも苦手なことがあって良かったわ・・・」

「・・・魔法使いたい・・・」

「元気出してくださいユウト」

「元気なんかでぇへんわ、魔力タンクやん俺・・・キャスターとか居たら一番に狙われるやろ・・・」

「大丈夫だと思いますよ、ユウトなら狙われたとしても瞬殺だと思います」

「今、その励まし方ってどうなんだ？セイバー・・・」

もう、アレやな・・・魔法使えるようになった銀さんがかめはめ波撃ってみたいとか思うのみて

ねぇわぁ・・・とか思ってた俺が鬱陶しいてたまらん・・・実際こうなったら・・・

撃ってみたい撃ってみたい撃ってみたい！！

「しょうがないわね・・・私が教えてあげようかしら？」

「・・・マジ？是非！お願いします！」

「！？ちょ！？分かったから！！土下座は止めて！！」

もう、プライドなんか知らん！

俺は千の雷とか闇の吹雪とか撃ってみたいんや！！

「リン・・・敵のマスターに魔術を教えてもいいのか？」

「ん～・・・其れもそうよね・・・って・・・

嘘よ！？お願いだからそんな泣きそうな目で見ないで！！」

「ユウトがチワワみたいで、可愛いです・・・」

「キャラ崩れてるぞ！？セイバー」

「五月蠅いですエミヤ」

「なんでさ！？俺つっこんだだけだぞ！？」

―深夜食堂がやるぐらいの時間まで・・・カット！！―

「と、いうわけで俺は何をしたらいいんや？」

「取り敢えずは、強化とかかしら？」

「ふむ・・・なぁなぁ凛ちゃん」

「なにかしら？」

「とある魔術の禁書目録に出てる魔術やってみていい？」

「・・・別に良いわよ？（出来るはずないだろうし）」

・・・多分出来るはずないとか思われてるんやろうな・・・

まぁ、できひんやろうけど・・・出来たら最強やろ・・・黄金錬金とか魔女狩りの王とか・・・

うむ・・・やってみよう・・・

先ずは・・・

「出てこい！金！」

アルス・マグナて想像すればよかった筈・・・！

「・・・ムリよ其れは・・・等価交換のとの字も無いじゃない」

「ですよねー・・・てことはもうムリじゃね？とあるの魔術って・・・」

「アレのルーンとかわからないしね」

「なら・・・圧縮圧縮魔力みたいなのを圧縮」

かめはめ波を想像して・・・パーソナルリアリティをなんたらかんたらで・・・・

「か～め～は～め～波ぁあああ！！」

―ポス―

「ぷく・・・」

「・・・」

もぉやだやわぁ・・・

ぽすってなんだよ・・・ぽすって・・・

はぁ・・・もぉやだ・・・

「く・・・くく・・・ゴメンって・・・ゴホン！取り敢えず、私の言うことを聞きなさい・・・」

「うん・・・そうするよ」

「先ず、このランプをかけれるようにしなさい」

―夜二時まで・・・カット！！―

「なんというか・・・・俺才能なさすぎだね」

「・・・ええ、流石にコレはなんとも言えないわ・・・
才能云々より魔力が多すぎて魔力に振り回されている感じね・・・
」

「だな・・・もう、俺剣ふりまわしとくコトにするわ・・・」

「・・・そうね・・・ゴメンね、力になれなくてゴメンね・・・」

「いや、大丈夫・・・上条さんも自分にある力でなんとかしてたし・・・
俺には剣や槍があるし心配せんでもええよ！」

「ていうか・・・もう眠い」

「あ、朝弱いのにゴメンな・・・」

「付き合うって言ったのは私だしね」

「・・・ココで寝るんやったら俺のベッド使って・・・俺は適当に
座布団頭にひいて寝るから・・・」

「・・・一緒に寝なさい・・・風邪ひかれても困るし・・・・」

「いや、そこは男女の関係云々ありますやん？」

「へぇ、教えてあげた私の言うことが聞けないんだぁ」

・・・小悪魔やん・・・

眠いから頭がどうかなってんのかも知らんけど・・・

もう、めっさ可愛い・・・黒笑が可愛い・・・ツンデレ可愛い

「ん～なら俺寝相悪くても文句言うなよ～」

「分かってるわよ」

「おやすみ～凜ちゃん」

「ん、おやすみ」

結局、起きたのが８時で学校遅刻しました・・・

凜ちゃんに切れられるわ、セイバーになんか怒られるわ・・・

不幸だ・・・

第三話　魔力あっても使えなきゃ唯の魔力タンクやし・・・ｂｙ悠人（後書き）

例え強くても、魔術はつかえません！
まぁ、攻略法としては某おろが口癖の抜刀齋の起用ですかね
魔術師は詠唱できませんし・・・
ギャルゲとかなら遠坂さんと眠ってるところがＣＧになるんだろう
なって・・・
誤字脱字の報告はお願いします！
では！

第四話　美味しいモノは好きですが、甘ったるいのは嫌いです（キリッｂｙセイ

《ｓｉｄｅ：Ｙｕｔｏ　Ｋａｎｚａｋｉ》

あ～朝見てる方にはおはようございます
昼見てる方にはこんにちは、夜見てる人にはこんばんは
どうも神崎悠人です・・・朝から理不尽な不幸に巻き込まれたんで
学校休もうと思ったんやけど
なんというか藤村タイガーがガオーてなって桜ちゃんにはフライパ
ンでしょうがないから学校に
凛ちゃんに話しかけるとジロリと睨まれ、暇だから校庭回ってたら・
・・

「・・・魔方陣？まぁええや・・・魔力のこめ方は分かってるし飽
和させてバーンしよか・・・
八つ当たりとかじゃないからな？全然ちがうからな？」

「・・・驚いた、アナタはこの基点がわかるのですね？」

「いや、適当に歩いてたらみっけたんやけど・・・」

「・・・まぁ、見つけたご褒美です・・・アナタは優しく殺してあ
げましょう」

「・・・あぁ、なるる～！お前さんサーヴァントか！」

「フフ・・・そういうアナタはマスターだったのですね
ならばこの基点に偶然と言えどたどり着くのも納得がいく」

「・・・何日か前の甘ったるい感じはコレかぁ・・・
あと、残念やったけど・・・お前は俺を殺されへんで～・・・
俺を殺すんやったらサーヴァント全部引き連れて、かつ神様でも
殺せるレベルの強さできぃや！」

「・・・アナタは馬鹿ですか？まぁ、殺してあげましょう」

―ズン―

「気かへんって言ってるやん」

―ガギン―

「てな訳で今回のお供は”ロンギヌスの槍”でええか」

「！？何故宝具を！？」

「へ～・・・コレ宝具なんか～・・・なんか変な感じはしてたんや
けど宝具か～
てな訳で、やり合うか？」

「・・・ココはひかせて貰います・・・その宝具は相性が悪い」

「ン～じゃあ、コレは壊させてもらうな～」

「そんなこと出来るはず・・・」

さ～てと、気分はパッセージリングを削るルークくんです
集中集中・・・超振動できるんちゃうか？とか考えずに集中集中・・
・

―バキン―

「・・・規格外ですね・・・」

「ほめ言葉や」

さて・・・終わったし帰るか～教室に

「よぉ、神崎」

「・・・どうした？ワカメ」

「（ギリッ）・・・い、いや～お前もマスターなんだろ？僕とくま」

「くみません！遠慮します！つか消えろ俺の目の前から！」

「（ブチッ）あぁ、そぉかよ！来いライダー！！」

「スミマセン、シンジ・・・そのマスターとは戦えません」

「うるせぇんだよ！」

―バキッ―

あ、女性殴った・・・ワカメが女性殴った

後、あの変な本気になる・・・エミリアいたら解析とか出来たのに・・・

でも、ワカメから魔力感じひんのに、なんでマスター？

・・・怪しい本、魔力無し・・・ここから導き出せる答えは・・・？

「あ～・・・ワカメその本でその女の人従わせてんやな～
そういうプレイがお好みですか？もしそうなら、本気で近づくな変態」

「うるさい！ライダーはやくやれ！！」

「・・・分かりました」

「・・・メンドイ・・・きてくれセイバー（棒）」

「・・・棒読みは無いでしょう」

「はや！？」

「いえ、ここら辺で鯛焼きかって食べてました」

「・・・」

「僕を無視するな！」

「「あ、いたんだ」」

「畜生！畜生！」

「取り敢えず、俺に本気を見せてくれへん？」

「はぁ、いつも無茶ぶりしますね・・・了解しましたユウト」

―楽勝だったのでカット―

「・・・どうしよか？この空気・・・」

「異常に早く終わりましたしね・・・」

「あ、そういや、今日教会に行くらしいから・・・よろしく！」

「何をよろしくしろと？」

「何かをや！」

「・・・」

「ゴメンて・・・お願いやから冷たい目は止めて」

「・・・」

―そんなこんなで夜まで・・・カット！！―

「よぉし！凛ちゃんよろしく！」

「・・・わかったわ」

・・・さて、教会までいくんやけど・・・
どうしようか？・・・暇やし・・・セイバーとしりとりでもすっか

「セイバー、セイバーしりとりしよぉぜ！」

「・・・まぁ、いいですが・・・」

「じゃあ、りからな～リス」「スイカ」「カメ」「メバル」「瑠璃色」「ローストビーフ」

「・・・食べモンばっかやん・・・」

「文句言わないでください、しりとりに付き合ってるんですから」

「・・・もうええわ・・・腹減るし・・・」

「あ、そうですか」

「・・・」

腹減った～・・・

帰ったら飯作ろう！麻婆カレー作ろう！

「着いたわよ・・・綺礼！いるんでしょ？7人目のマスターをつれてきたわ」

「おお、そうか・・・ようこそ少年、私は言峰綺礼という・・・君の名は？」

「神崎悠人や」

「そうか・・・それでは神崎悠人、君が最後のマスターという訳か・・・」

「そぉやで」

「お前気楽だな・・・」

「シローくん！気楽がええねんで！」

「・・・頭痛い」

「・・・フム・・・それでは、ココに聖杯戦争の開幕を宣言する
各自がおのれの信念に従い思う存分競い合え」

「おうよ！」

「さて、家帰るかぁ」

「ちょ、ちょっと待ちなさい・・・同盟くまないかし」

「オッケー」

「・・・ユウト・・・まぁいいのですが」

「・・・最後まで言ってないのに・・・」

「ま、まぁ遠坂も悠人と敵にならなくて良かったじゃないか」

「うるさい！」

「なんでさ！？」

「ま、ええやん・・・はよ帰って麻婆カレー喰おうぜ！」

「えーもう帰っちゃうんだ」

「誰！？」

「初めまして、私はイリヤ・・・
イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言ったら分かるかしら？」

「アインツベルン！？」

「・・・先生分かりません！」

「・・・アインツベルン・・・聖杯の入手を宿願とする魔術師の家計・・・

毎回この戦いにマスターを送り込んでいるヤツらよ・・・」

「へぇこんなロリっ娘がマスターか」

「・・・ろり？クスクスクスクス・・・そこのお兄ちゃんを殺そうと思ってたけど・・・

先ずは・・・そこの礼知らずを殺してあげる！おいで！バーサーカー！！！」

「■■■■■■■■■■■■■■■ァ！！！」

「いけ！バーサーカー！其奴らみんなたたきつぶしちゃえ！」

「下がってください！ユウト！！」

「手伝うで！セイバー！」

「そういえば、アナタは普通ではなかったですね・・・」

・・・酷くね？普通じゃないって分かってるけどめんと向かって言わんでもええやん・・・

もう、いいし・・・俺普通ちゃうしぃ・・・木刀でたたかったるし！！

「悠人！？なんで木刀なのよ！？」

「ちょ！？ユウト！？それでは自殺行為でＳ」

ーズガァアアアン！ー

「もういいし・・・俺普通ちゃうし・・・
某テイルズで隠しボスを木刀で倒したりする感じでいくし・・・
別に拗ねてねぇし・・・」

「「「・・・」」」

「■■■■■■■■■■■■■■■!?」

「うるさい」

「え！？バーサーカーが一回死んだ・・・」

「・・・規格外にも程があるでしょう」

「今回もアーチャーのマスターに同意します」

「俺も同意する・・・」

「・・・嘘・・・私のサーヴァント・・・ヘラクレスなのよ？」

「・・・お休みなさい！！！！」

「■■■・・・■■ァ」

「ふん・・・峰打ちやから死ぬことはねぇ！」

「「「一回死んだわよ！／死にました！／死んだぞ！」」」

「・・・皆で突っ込まんでもええやん・・・」
「バーサーカー！！ねぇバーサーカー！！」
取り敢えず、あの少女に近づいていって・・・
「ちょ！？悠人止めろ！！」
「・・・」
頭に向かって・・・
「悠人！！」
拳骨を落とした
「う～・・・」
「簡単に人殺すとか言わん！俺ァ悲しいで～・・・
こんな美少女がさ・・・人に向かって殺すとか・・・ホンマ悲しいで・・・」
「う～・・・早くころし「ません！！」」
「もう、良いからソコのつれて俺ン家来い！」
「え？」
「何を言っているんですか？ユウト」

「・・・また、あの馬鹿・・・」

「よかった・・・殺すとは思わなかったけど、ケガもさせなくて」

「また・・・とはどういうコトですか？」

「昔からあーなのよ・・」

第四話　美味しいモノは好きですが、甘ったるいのは嫌いです（キリッｂｙセイ

えぇ、今日もコッチですｗ
もう次の話のネタもできかけてますｗｗ
さて・・・誤字脱字の報告はお願いします！
では！

第五話　ネタバレするとカレーパーティｂｙ悠人

《ｓｉｄｅ：Ｙｕｔｏ　Ｋａｎｚａｋｉ》

あ～朝見てる方にはおはようございます
昼見てる方にはこんにちは、夜見てる人にはこんばんは
どうも神崎悠人です・・・
朝から理不尽な不幸に巻き込まれたんで学校休もうと思ったんやけど
なんというか藤村タイガーがガオーてなって桜ちゃんにはフライパンでしょうがないから学校に
凛ちゃんに話しかけるとジロリと睨まれ、暇だから校庭回ってたら・・・
変な姉ちゃんに絡まれて、ワカメに絡まれて、セイバーに頼んで瞬殺させて、
あっという間に教会ついて、白い少女に会って、ごついの倒して今に至ります

「さて、レッツカレーパーティ！！」

「「「「なんでさ！？」」」」

「え？」

「え？じゃ無いわよ！」

「ユウト！バーサーカーのマスターを連れてパーティとは何を考えているのですか！？」

「いや～・・・飯喰えば仲良くなるかなって？」

「疑問で言われても・・・」
「取り敢えず・・・イリヤだっけか？俺特製麻婆カレーをやろう！」
「え？あ、うん・・・」
「さぁ・・・端と食べてくれたまえ！」
「もきゅもきゅ・・・」
「どうだ？」
「・・・おいしい！」
「（ニヤニヤ）取り敢えず皆食べてみてや！」
「・・・うめぇ・・・負けた・・・」
「ユウト！おかわりを！」
「早いわ！」
「っく・・・ココまで美味しいとは・・・」
「どやっ？」
「「「「美味しいです」」」」

―完全に食べ終わるまで・・・カット！―

よし！うまいと言ってもらえた・・・
取り敢えず、まぁ・・・イリヤちゃんに何で攻撃してきたんか聞こか・・・

「なぁ、イリヤちゃん」

「なに？」

「何で攻撃してきたんや？」

「・・・言わなきゃ駄目？」

「ン」

「・・・そこのお兄ちゃんはキリツグの息子でしょ？」

「・・・何で爺さんのコト知ってるんだ？」

「私はキリツグの娘よ」

「「「「・・・え？」」」」

「だ！か！ら！「いや、ええ？あの爺さん盛ってたんか！？」／／／」

「アンタ！女の子いるんだからそう言う言葉は慎みなさい／／／」

「あ、悪ぃ・・・つい学校での癖で・・・」

「・・・ンン／／／！取り敢えず・・・先ず、其れで何故殺しにきたの？」

「私はキリツグに捨てられたの・・・・だから・・・息子のお兄ちゃんを殺そうと思って・・・」

「なるほどなぁ・・・でも、失敗したんやし・・・
そうやなぁ・・・俺達と手を組まんかぁ？どうせやったら仲間は多い方がええし・・・
なんかイリヤちゃんには変な感じがあるし・・・狙われたら後味悪いし」

「変な感じって・・・どういうコトだ？」

「ん？・・・いや、なんか身体が魔力のような・・・」

「・・・そうだよ、お兄ちゃん」

「悠人でええよ」

「ユウト？」

「応！・・・で？その正体とは？」

「聖杯の器だよ」

「「「「！？」」」」

「あ～なるほどな・・・だから変な感じしたんか・・・やったらやっぱまもらなアカンやろ・・・」

聖杯だろうとなんやろうと女の子を見殺しにする意味が分からんしな・・・

「私が聖杯だから「じゃなくて、俺見殺しにすんの嫌やし」・・・え？」

「だから、俺は女の子を見殺しにすんのは絶対やだ」

「・・・流石悠人ね・・・」

「本当に流石だな・・・やっぱり」

・・・俺がいつもこんなコトしてるから慣れたのか・・・

反省も後悔もしないがな・・・と、言っても普段は猫とか犬とかやけどな・・・

「・・・私を守ってくれるの？」

「うむ、そこのごついのと一緒に守ったるわ！」

「ユウト・・・何故其処で逆転裁判のポーズをするのですか？」

「なんとなくやで！」

「・・・」

「いや、ゴメンやから・・・そんな冷たい目で見んといて・・・」

「うん、其れムリです」

「・・・この漫才が恒例になってきてるわね・・・」

「本当だな・・・」

「アハハハハ・・・ユウトは面白いね・・・」

「・・・何故こうなっているのだ・・・頭が痛い・・・」

・・・このカオスな感じがええなやっぱ・・・

さっきみたいに殺伐とした空気は苦手やし、面倒やし・・・

「さて・・・コレで一件落着やな・・・」

―違う場所にて・・・―

「そうだ・・・世界を超えよう！」

第五話　ネタバレするとカレーパーティｂｙ悠人（後書き）

さて・・・誤字脱字の報告はお願いします！
では！
・・・今回短いぜい

第六話　気むずかしそうだと?そうかね・・・ｂｙアーチャー

《ｓｉｄｅ：Ｙｕｔｏ　Ｋａｎｚａｋｉ》

あ～朝見てる方にはおはようございます
昼見てる方にはこんにちは、夜見てる人にはこんばんは
どうも神崎悠人です・・・
朝から理不尽な不幸に巻き込まれたんで学校休もうと思ったんやけど
なんというか藤村タイガーがガオーてなって桜ちゃんにはフライパンでしょうがないから学校に
凛ちゃんに話しかけるとジロリと睨まれ、暇だから校庭回ってたら・・・
変な姉ちゃんに絡まれて、ワカメに絡まれて、セイバーに頼んで瞬殺させて、
あっという間に教会ついて、白い少女に会って、カレーパーティーして、
なんだかんだで恒例の漫才して、白い女の子がイリヤだとわかったところで今回だぜ

「取り敢えず・・・なんや?俺ン家に泊まるか、そこのシロークk」

「ユウトの家がいい!」

「俺の家の部屋は４つ・・・よし、丁度ええな!」

「私は、ユウトと一緒の部屋の方が良いのですが」

「男女の関係になっちゃうから駄目とか虎が五月蠅いからな～・・・」

「虎？」

「そうやで？イリヤは知らんと思うけど・・・
俺達の担任がシロークントコでただ飯食って何て言うか五月蠅い？」

「・・・悠人・・・其れは酷くないか？」

「酷くはないやろ・・・」

「・・・私たちくむのよね？」

「そうやで、凜ちゃん」

・・・何でそんなことを今更？
果てしなく面倒なことが起こりそうやけど・・・ま、ええか・・・

「私達も悠人の家に住まわせなさい」

「・・・ま、ええけど・・・部屋どうするんや？」

「悠人の部屋で良いでしょ？既に一回一緒に寝てるし・・・」

・・・笑顔が黒い・・・笑顔が黒いで、凜ちゃん・・・

「・・・ま、ええか？」

「駄目です！」

「何故かしら？セイバー」

「一応マスターなのですから・・・」

「その前に幼なじみよ？」

「む・・・しかし・・・」

「しかしもかかしも無いわ、コレは既定事項なの」

「なら、私も一緒の部屋で寝ます」

「・・・さっきから、空気のようね・・・
駄菓子菓子！あ・・・間違った・・・だがしかし！私もその話に入るわ！」

・・・あの～俺の部屋のベッドなんで二人までしか寝れませんけど？
・・・どうせ、聞いてくれへんよね・・・ハァ・・・

「大丈夫かね？」

「あ、うん・・・もの凄く理不尽だけどね・・・」

「分かる・・・分かるぞ・・・」

「あ、アーチャー・・・・」

―ガシッ―

「こういうときはこう言うのだ・・・」

「なんとなく分かるで・・・せ～の・・・・」

『なんでさぁ！！！』

「・・・どうだ？」

「なんとなくスッキリしたわ・・・」

「私にもお前」

「悠人でええよ」

「なら、ユウト・・・私にもユウトと同じようなコトが有ったのだ・・・

さぞ大変だろうが・・・がんばれ・・・」

「・・・あぁ、アーチャー・・・俺、これからも頑張っていくよ・・・」

・・・アーチャーは気むずかしいと思ってたんやけど・・・

意外と話安いヤツやってんな・・・

しかも女難の相が出てるモノ同志だからな・・・

やっぱ、気があうんやろぉな・・・

「確か悠人の部屋は二人しか寝れないわ！」

「なら・・・・じゃんけんで」

「・・・そうね・・・」

『じゃんけん・・・・ホイ！』

凜→パー、イリヤ→グー、セイバー→グー

「よっしゃあ！」

「・・・キャラ崩れてんで？凜ちゃん・・・」

「取り敢えず、私は悠人と一緒に寝るから・・・おやすみ」

「俺の意見はぁぁぁあああ？」

―ズルズルズル・・・―

「なんというか・・・今回も空気だし、出番ないし、原作主人公だった筈なのになぁ・・・

アハハ・・・・目から汗が・・・」

―違う場所にて・・・―

「ナギサ！準備はできた？」

「取り敢えず色々持ってきたぞ」

「取り敢えず、あのバカに一言いってこい！」

『分かった』

第六話　気むずかしそうだと？そうかね・・・ｂｙアーチャー（後書き）

今回も短いなぁ・・・

誤字脱字報告よろしくです。では！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5567x/

Fate/stay night　－ちょっと異世界までお使いしてきた英雄くん－

2011年11月26日20時58分発行